



日本での初の公演でのリハーサルには学生を招き、オーケストラ音楽の真髄を築き上げてゆく様子を紹介した（2008年12月19日、東京芸術劇場）

会場が熱狂したオーケストラ
給田 昨年末にシモン・ボリバル・ユース・オーケストラ・オブ・ベネズエラ（以下SBYOV）の来日公演を聴かせていただきましたが、こんなに素晴らしい、人を圧倒するオーケストラがあったのかと、度肝を抜かれました。もちろん話には聞いていましたが、その何倍ものインパクトがありました。

山田 日本のコンサート会場でああいう盛り上がりをしたのは信じ



写真提供：ベネズエラ大使館

「エル・システム」を語る

特別座談会

セイコウ・イシカワ 駐日ベネズエラ・ボリバル共和国特命全権大使

山田 真一 文化創造研究所所長

給田 英哉 才能教育研究会 常務理事

敬称略

「ベネズエラ」と聞いて世界地図で指し示すことができる人はどのくらいいるでしょう。有数の産油国でありながら多くの貧しい人々を抱える国。そのベネズエラの「シモン・ボリバル・ユース・オーケストラ・オブ・ベネズエラ」(SBYOV) が、今、世界を熱狂させています。そのオーケストラを生んだ「エル・システム」という音楽教育システムを中心に、セイコウ・イシカワ駐日ベネズエラ大使と山田真一さん（前号でも紹介した「エル・システム」の著者）に、給田英哉常務理事がお話を伺いました。



られないことでした。
給田 あのコンサートはどうやって実現したのですか？

イシカワ 4年前、世界にこのエル・システムを知ってほしいと動き始めました。芸術を通じて社会教育をする、音楽教育をすることで、ベネズエラでこれだけ多くの変革をもたらしているとなると、それは発展途上国だけの問題ではないのではないかと考えました。それなら先進国でも、もちろん日本に持ってきて、普遍的な価値があるのではないかと。エル・システムに含まれる、規律、チームワーク、目標に向かう努力というようなくつかの教育の要素が受け入れられるかどうかという関心もありました。アメリカやヨーロッパにはすでに紹介していましたが、アジアには、まだでしたので、日本、韓国、中国のツアーを企画したのです。特にクラシック

音楽が浸透している日本でこういう音楽をジャッジしてほしいと思えました。それにパスしたらすごいことですから。

給田 なるほど、そういうお考えがあったのですね。山田さんにも伺います。私は素晴らしい本をお書きになったと思いますが、これだけエル・システムを掘り下げて本を書きたいと思われたきっかけは、なんだったのですか。

山田 私の専門は文化政策、アート・マネージメントですが、組織論、社会構造論を大学でも教えています。それで、ものの方として、アーティストや演奏だけでなく、それを作っている構造やシステムにも常に心があります。

それと90年代にアメリカに住んでいた時、最初にプロの音楽家による音楽教育が盛んなことに驚いたのです。アメリカのオーケストラ

「エル・システマ」を語る

※鈴木先生の初期の弟子で、世界的に活躍するヴァイオリニスト。1979年にベネズエラ政府文化庁からの要請で、国際交流基金の文化使節として3ヵ月間滞在した。

は、今世界で一番レベルが高いと言

われています。ですから質が高ければギヤラも高く、傲慢なのではないかと思われがちですが、彼ら一人ひとりは市民や子どもたちへの無料のコンサートや教育にとっても熱心です。15年前、20年前には日本にはほとんどありませんでしたので、この違いはなんだろうと、プロフェッショナルを絡めた音楽教育に目が向くようになりました。それらはアウトリーチと呼ばれる活動なのですが、最近、実はそれと同じようなやり方をベネズエラでやっているのを知りまして、それがエル・システマに興味を持ったきっかけでした。

給田 なるほど。それで評論というよりベネズエラの社会構造や歴史の中で、この活動がなぜ出てきたのかということに踏み込んで書かれているのですね。まさにこの国を理解するのに最高のテキストだと思

たのではありませんか。

山田 取材時は、ある程度仮説を立てて、現地で検証していくのが私のスタイルです。一般的に途上国では教育程度はそれほど高くなく、特に自国で教育の再生産をするシステムがないというイメージがありますので、ベネズエラではどうだろうと、まず思いました。それに音楽は高い知識と忍耐力が要求される分野ですから、もし音楽の教師が自国で再生産できているとしたら、高い教育システムを持っているという

いました。

スズキ・メソッドとエル・システマの出会い

給田 本を拝見するまで知りませんでした。エル・システマにスズキを取り入れられるきっかけを30年前に小林武史さん※が作られたというストーリーも、本当に面白い。アブレウ博士がアメリカに広がっていたスズキを知っていて、小林さんを招いたということですね。

山田 そうです。

給田 スズキ・メソッドは日本では最初から鈴木先生の私塾として、純粹に民間で始められましたが、アメリカでは大学でも取り入れられたり、大きく広がっていました。でも、小林武史さんが、招かれた時に現地でのアレンジのあまりのちぐはぐさに怒って「話が違う」と帰って来てしまえば、また違う展開になって

ことになります。それとSBYOVはCDでは聴きましたが、ある意味CDの音は作り物ですから、生の音はどうだろう、という気持ちもありました。もし録音どおだったら相当高い知識とスキルを持った指導者がいるということになりますし、それはたぶん難しいから、きつと外国人の指導者がいるだろう、という仮説を立てました。でも行ってみて驚いたのは、皆さんベネズエラ人なのです。全国ネットで20万、30万人の生徒さんを抱え

エル・システマ

ベネズエラで社会政策の一環として貧困地区も含め、全国に展開されている音楽教育システム。貧富の差が激しいこの国で、誰にでも無料で音楽の基礎知識や楽器の演奏を教え、楽器を与え、合唱やオーケストラに参加させる。親は働いていて、学校は午前中で終わりという環境の中で、子どもが犯罪に巻き込まれたり、手を染めることが多かったが、放課後に毎日通うことのでき、熱中でき

るオーケストラ活動は、子どもたちを犯罪から守ることにつながった。現在、20万人以上の子どもが通い、各支部の400の青少年のオーケストラ、またその選抜オーケストラがいくつもある。その頂点となるのが「シモン・ポリバル・ユース・オーケストラ・オブ・ベネズエラ(SBYOV)」。世界でその実力が認められ、2008年12月の日本公演でも大変な話題となった。

いたでしょうね。彼がふんばって残られて、スズキ・メソッドで現地の子どもたちに二ヵ月間でみっちり教えたことが、今日につながっているわけです。山田さんもベネズエラに行かれて驚かれたことが多かつ

ていますから、スタッフだけで何千人います。貧しい地域の支部のスタッフでも何カ国語も話していましたが、諸外国のこと、音楽のこと、楽器のことも知識が豊富で、レベルが高い指導者がたくさんいました。日本の指導者よりレベルが高いではないかというくらい、インパクトがありました。

給田 私もこの本で読んで驚きましたが、人間のレベルは、そうは違わないでしょうから、教育システムがいかに大事か良くわかります。着実に国の一つの政策としてベネズエラに根づいています。

イシカワ エル・システマが発展してきた源は、鈴木先生が始められたスズキ・メソッドの理念と共通しているものがあります。それは才能は生まれつきではなく、きちんと教育されれば開花していくもので、それは先進国だけでなく、ほかの発展途



セイコウ・イシカワ
Seiko Luis Ishikawa Kobayashi
駐日ベネズエラ・ポリバル共和国特命全権大使

1972年、ベネズエラのポリバル市生まれ。日系2世。98年、シモン・ポリバル大学で金属工学学位取得。00年に、アメリカのハーバード大学大学院にてビジネス戦略、マーケティング、金融などを専攻とする特別講座修了。同時期にボストンのマネージメント・コンサルティング会社ロス・グループでビジネス開発に関わるトレーニングを受講。01～04年まで、駐日ベネズエラ・ポリバル共和国大使館に経済・商務担当官として勤務後、スペインで同職に就く。05年、沖縄におけるIDB(米州開発銀行)年次総会にベネズエラ・ポリバル共和国ミッションの一員として来日。その後、駐日ベネズエラ・ポリバル共和国大使館特命全権大使に就任、今日に至る

「エル・システマ」を語る



山田 真一 Shinichi Yamada

文化政策、アーツマネジメント研究。シカゴ大学大学院博士課程修了。大学教員を経て文化創造研究所を設立。文化事業コンサルティングやマーケティング調査、シンポジウム、セミナーなどを行う。全国紙への執筆、コメント引用など多数。また、芸術評論の寄稿も多い。昭和女子大学などで非常勤講師も務める。著書に『エル・システマ―南米ベネズエラの社会政策』（教育評論社）、『アーツ・マーケティング入門』（水曜社）、『Cahier Export Classique Japon―日本の芸術音楽市場構造』（共著、Bureau Export de la Musique Française）、『知られざるオーケストラ大國アメリカ』（集英社、2009年秋）など。

上国でも同じだと、特にアブレウ博士が気づいたのが始まりでした。

山田 ベネズエラでは残念ながら所得の問題とか家庭環境で勉強できない人は多いようですが、環境を政府が整えると、とても熱心に勉強する国民です。それに私は感動しました。ベネズエラの方は学ぶ意欲とか、向上心が強いのでしょうか。

イシカワ 学びたいという気持ちは強いですね。地理的に見ても私たちの国は南アメリカの中でも、人の行き交うところにあります。歴史的に見てもカリブの人たちがアマゾンからアンデスに行く道にありま

すし、アメリカにも近い。ですから外のものに興味があり、それを取り入れていくことに抵抗感がありません。それに教育や芸術はお金のある人だけが受けるのではなく、誰でも

も権利があると考えています。それに対して国が、きちんとサポートしないといけませんし、チャンスは皆に与えなければなりません。いろいろ試行錯誤はありましたが、私たちはそういう価値観を持っています。

山田 それでなければ、このシステムは発展しなかったでしょうね。イシカワ それにベネズエラ人は、とてもリズム感があると言われています。どこの家庭でも誰かが何かの楽器を演奏でき、それは日々続

いています。天性の音感というのか、リズム感を持っているようです。山田 現地で聴いてもそう感じました。ただ、リズム感覚がいいというのがすべてクラシック音楽にプラスに作用するとは限りません。ラ

エル・システマで与えられたら、楽器をまったく知らなかった子どもたちが肌で感じて猛烈に練習するようになる。それでその中から世界的にトップレベルのプレーヤーが出てきたわけですね。この本に出てくるコントラバスのエディクソン・ルイースは17歳でベルリン・フィルの団員でしょう。山田 それも楽器を始めて7年くらいです。山田 指揮者のドウダメルもそうですが、こういうシステムがなければ

る。この6月には、イツァーク・パールマンとの共演も果たしたばかり。現在27歳。2009年秋には、ロスアンゼルス・フィルの音楽監督に迎えられる。今後も目が離せない存在。

ホセ・アントニオ・アブレウ博士

少人数のユース・オーケストラの立ち上げも含めて、エル・システマ全体の生みの親。優れたピアニスト、オルガニストで、政治的にも、政策的にも確かな力をもってエル・システマを導いてきた。



グスターボ・ドウダメル

エル・システマが生んだ、若き才能あふれる指揮者。SBYOVのヴァイオリニストから指揮者に転じ、2004年、第1回グスタフ・マーラー国際指揮者コンクールで優勝後は、欧米の一流オーケストラでの活躍も目覚ましく、「100年に1人の天才指揮者」と絶賛されている。サイモン・ラトル、クラウディオ・アバドなど名指揮者たちも相次いでベネズエラを訪れるなど、新鮮な驚きを世界に与え続けている。



ば、才能を開花することもなかったかもしれない。スズキ・メソッドも世界中で音楽の底辺を拡大することには大きく貢献してきましたが、ベネズエラでもそれくらい底辺を広げて厚くしたということです。

オーケストラをシステムの柱に

イシカワ それと音楽教育の中で、オーケストラのアイデアが大事でしたね。オーケストラがあれば次の目的ができます。またオーケストラに入ることで刺激も受け、そこで初めてチームワークなどを覚えていきます。始めたばかりで、6歳でもオーケストラに入れるのはすごいなあと思いました。

山田 大変な刺激だろうと思います。上手になれば上のオーケストラに入れるというのは、それで一生懸命練習する。結果として犯罪が減つ

「エル・システマ」を語る



給田 英哉 Taida Hideya
筆頭常務理事

スズキ・メソッド第1回卒業生の一人。1938年生まれ。61年東京大学教養学部教養学科卒業。丸紅(株)に入社、2度にわたり合計10年ロンドン駐在、専務取締役、丸紅経済研究所会長を経て、02年1月国際交流基金理事・日米センター所長に就任。日英協会専務理事を長年勤めたほか、現在は国際経済交流財団理事、ブルデンシャル日本法人PCA生命保険株式会社監査役。アークヒルズクラブ専務理事。98年から月刊誌「外交フォーラム」編集委員。99年以来、本会常務理事。04年から国際教養大学理事・特任教授。02年長年日英関係の強化に貢献した功績により、英国エリザベス二世女王陛下より名誉大英勲章 CBE (Commander of the Most Excellent Order of the British Empire) を叙勲。

山田 アメリカもどんどんベネズエラに人を送り込んでいますが、スズキ・メソッドの発祥の地である日本は何も動きがなくて、もったいななどと思います。

給田 今回いろいろインタビューをされて、社会政策としての意思は感じましたか？

山田 それに関しても現地では驚くことばかりでした。子どもたちも含めてメンバーは、自分たちがどういう政策に関わっているかということをし、しっかり認識していました。

「どうしてエル・システマに入ったの」と小学生に聞いても、はつきり「これは社会貢献になるんだ」と言うのです。先生たちがそういう話をしているのだからと思えますが、前触れもなく外国人が質問してもそういう言葉が出てくるのですから、たぶん肌で理解しているのでしょう。放課後エル・システマに来なかったら自分たちがどんな状況で過ごすのか、子どもなりに、きちんと理解しているわけです。

給田 私たちが60年前にスズキ・メ

たというのもすごい。オーケストラはチームプレイそのものですし、アブレウ博士がオーケストラを軸に据えたということが、エル・システマの一つの成功の柱になったのだと、読んでいて思いました。

山田 現地では今でもスズキの指導曲集を使っていますが、そこからオーケストラで弾けるというところがユニークです。アメリカにもそこまでのものはありませんので、その点が逆に今、アメリカ人を熱狂させています。アメリカ人はスズキ・メソッドのことはとてもよく理解していますし、イギリスも同じです。4月にSBYOVのイギリス公演に行ってきたんですが、1週間で6万7万人の聴衆を集めました。アブレウ博士やメンバー、イギリス側でエル・システマを使って教育している人たちを招いてシンポジウムがありました。そこでもスズキ・メソ

ドの話が出ていました。スズキはイギリスで昔から定着していますので、エル・システマがスズキに良く似ていると気づくようで、そういう質問や議論が出ていました。そのくらい両者に親和性が感じられるようです。ただ、スズキ・メソッドをベースにして、オーケストラでも弾いてしまうということはイギリス人にも驚きであり、新鮮だったようです。今後はスズキ・メソッドに加えて、エル・システマも国を挙げてやろうとしています。

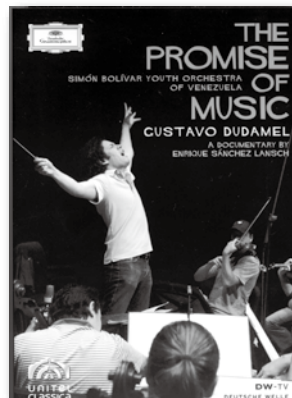
給田 日本でも政治や教育行政に関わる人たちにも、ぜひこの本を読んでもいただき、音楽を通じた幼児教育の重要性を再認識していただくためにも、こういう展開もあるという事を理解してほしいですね。やはりイギリスは素早い。あれだけ古い国でありながら、新しいことに柔軟性があります。

ソードに巡り逢った頃も、本当に貧しかった。でもあの頃スズキ・メソッドがめらめらと日本中に広がっていったのは、やはり皆が何かを求めていたからでしょう。当時学んでいた子どもたちは、もう楽しくて楽しくて仕方なかった。豊かになりすぎると、選択肢がたくさんありすぎて、ある意味かわいそうです。今、日本でスズキ・メソッドが伸びにくいというのも、社会環境が大きいでしょう。逆にベネズエラでは社会政策として、うまく作用しています。

コラボレーションへの道

給田 エル・システマとスズキ・メソッドが出会って30年が経ったわけですが、今後どういうコラボレーションができるでしょう。

イシカワ 今、ベネズエラの政策目標としてエル・システマを100万人レベルにまでもっていきたいと



「エル・システマ」をさらに知るには、いろいろなメディアが出ています。(左) 国際ベートーヴェン音楽祭に参加する様子を追ったドキュメンタリーDVD。6,000円。(中) SBYOVが演奏する南米の音楽を肌で感じられるCD。バーンスタインの「マンボ」は圧巻。3,000円。座談会に登場の山田真一さんの著作「エル・システマ」。教育評論社 2,200円。いずれも税別。

「エル・システム」を語る



思っているのですが、課題の一つは楽器の確保、もう一つは音楽を教える先生の確保です。この教える人の面で何か、つながりができないのでしょうか。それに、日本ではエル・システムを使ってオーケストラ作りを始めてもいいのではないかと思うのです。それはこちらからお手伝いできると思います。そういう補充

的な関係ができるのではないのでしょうか。

給田 確かにお互い学ぶことはたくさんあると思います。スズキも良い指導者を増やしていくことが運動を進めていくことですが、育成を少し怠ってきてしまいました。先生は高齢化していくのに、なかなかすぐに後継者は育ちません。今、それを増やそうとしています。若い人たちが国内だけを見るのではなく、メソッドを身につけて、英語やスペイン語でコミュニケーションできるようにすれば、ベネズエラに行つて一緒に活動する道はあるのですね。外国での活動の場は無限にありそうです。

イシカワ 来年もまた、SBYOVの日本でのコンサートを計画しています。昨年も小さなアンサンブルで学校をめぐって交流をしたいと思っていたのですが、時間の制限が

あつてできませんでした。来年はアブレウ博士も日本のツアーを長くしたいと言っていましたので、そういう時にスズキ・メソッドの皆さんともコラボレーションできるのではないでしょうか。

山田 ロンドンでも、SBYOVの公演は2回でしたが、その他にブラサンサンブルやプロの奏者とのコラボレーション、アウトリーチと様々な活動がありました。日本でもぜひやっていただきたいですね。

給田 今回このエル・システムに触れたことで、「音楽を学ぶことは人とのコミュニケーションが自然に取れ、人を思いやるようになる」ということ、音楽を通じての「人間教育」という鈴木先生の理念に、とても先進性があったことを再認識しました。コラボレーションを何とか実現させたいですね。楽しいお話の数々、ありがとうございました。